

パーク・コレクション蔵「鉢かづき物語」

——翻刻と解題——

小林 健 二

要 旨 パーク・コレクション蔵「鉢かづき物語」は、数多く伝存する「鉢かづき」諸本の中で、I類本の御巫本系の構造を持ちながら、本文はII類本の御伽文庫本など流布本系との混態をなす、特異な伝本である。「鉢かづき」の流布を考える上で重要な一本と思われるので、ここに翻刻・解題を添えて紹介する。

【書誌】

〈所蔵者整理書名〉 はちかづき物語図冊子

〈外題〉 表紙中央に貼られた、縹色地に金箔を散らした題簽に「はちかづき 上(下)」と墨書。

〈内題〉 なし

〈整理番号〉 カタログ番号59

〈書写年時〉 江戸前期

〈表紙〉 紺色無地

〈見返し〉 雷紋繁艶出し文様の銀箔張り

〈料紙〉 鳥の子

〈装丁〉 袋綴じ

〈巻数〉 二卷

〈数量〉 二冊

〈寸法〉 縦一六・五糎×横二四・〇糎

〈紙数〉 上巻二〇丁・下巻二九丁

〈一面行数〉 二二行

〈挿絵〉 奈良絵風の濃彩画 上巻七図・下巻七図

〈本文〉 漢字・平仮名交じり

【内容】

御伽草子「鉢かづき」は御伽文庫二十三編にも所収されたポピュラーな作品であり、その諸本は数多く伝えられているが本文に大きな揺れはなく、松本隆信氏によりその本文系統は慶応義塾図書館本（慶応本と略称）・大阪青山歴史文学博物館本（赤木文庫旧蔵本、青山本と略称）などの古写本の本文を、古活字丹緑本が省略や改変を加えながら継承し、さらに少改訂を経て御伽文庫本系や松会本系の版本、すなわち流布本へと継承されていくという大筋が示され、今日まで支持されてきたと言つてよい。¹⁾

筆者は、『寝屋川市史』第九巻「鉢かづき編」の編集に関わり、「鉢かづき」の諸本を広く調査・整理する機会を得て、これまでの主要伝本である古写本から御伽文庫本へ流れる諸本に対して、従来、孤本ゆえに末流本とされた清水泰氏蔵奈良絵本（清水本と略称）や、異本と位置づけられた御巫清男氏蔵奈良絵本（御巫本と略称）の系統の新出伝本を発見し、これらが諸本研究のうえで無視できない伝本群であることを確認した。また、個人蔵（廿日楼旧蔵）の絵本改装絵巻（廿日楼本と略称）を新たに見出し出す僥倖を得た。廿日楼本は極初期の絵本の形態を持つもので、他本に比して極めて簡素な本文を有するが、清水本と近い関係にあることが推測され、御巫本とも共通する点が認められるなど、注目すべき伝本である。これら新資料の出現により、それまで本文分量の多い古写本から少ない伝本へと展開したとする、つまり省略化・簡略化される本文の変遷過程を想定する説が見直される必要が出てきたのである。

すなわち、古写本の物語構成と廿日楼本のそれとを比べると、継子物婚姻譚としての根幹要素をすべて含んでおり、廿日楼本がより素朴な形を伝えているとも考えられるのである。そこで、廿日楼本・清水本・御巫本の系統をⅠ類本、古写本から古活字本・版本と流れる諸本をⅡ類本と括つて、「鉢かづき」諸本における本文の展開につい

て考察を重ねたところ、Ⅰ類本に属する廿日楼本のような素朴な本文の系統から、他の継子物語などの影響をうけて本文を増幅・増補させたⅡ類本古写本系の本文が生まれ流布本へと展開した、と一応の見通しが立てられるに至った。²⁾

ところで、右の再整理によって御巫本系統が無視できない伝本群であることが認められようが、ここに翻刻紹介するパーク・コレクション本（以下、パーク本と略称）も、御巫本系の構成を有しており、この系統では六本目の伝本ということになる。ただし、御巫本の系統に連なるものの他本とはかなり異なった本文を持ち、御巫本系統のなかでも特異な本として位置付けられるものである。次に、その特徴となることを列記する。

①パーク本は、Ⅰ類本の御巫本系の構造を持ちながら、本文はⅡ類本の御伽文庫本など流布本系との混態をなす。これまで、このように顕著なⅠ類本とⅡ類本の混態本文はなかったので、「鉢かづき」の流布を考える上で貴重な一本となる。

②いゝたか夫婦が長谷の観音に参籠して姫を授かる、いわゆる申し子の段であるが、観音の二度目の示現で願いがかなうものの、夫婦のどちらかが子供が七歳になると死ぬことを予告され、その通りに姫が七歳の時に母親が死を迎えることは、説経節「しんとく丸」の高官の信吉夫婦が清水観音に申し子をする話型と似ていて、説経など語り物の影響を受けていることが考えられる。

③継母と一緒にたつ鉢かづき姫の讒言をする女房に「しきしま」という固有名詞が与えられている。また、四條の三位中将の御曹司である宰相の乳母が、挿絵ではあきらかに男性であり、「さきやうのしん」という固有名詞が付されている。

④物語の末尾が、長谷観音の靈験利生だけでなく、鉢かづき姫の鉢から出てきた宝物が宇治の宝蔵に収められ、鉢

が覆っていた箱が法華經八軸の妙典を収めた箱であると説く。

⑤所収する和歌が五首と少なく、基本的にⅡ類本系所収の和歌と似るが、相違する点もあること。

以上のような問題点を有するが、それらの考察についてはまた後日を期したい。何れにせよ、江戸前期の段階で、既にⅠ類本とⅡ類本が交渉を持っていたことを示す資料として貴重な一本であり、ここに翻刻して紹介する所以である。

末尾になったが、本資料の翻刻紹介をご許可いただいたMary and Jackson Burke Foundation に対して、記して深謝する次第である。

〈注〉

(1) 「御伽草子本の本文について (二) — 鉢かづきの草子 —」(『斯道文庫論集』三、昭和三十九年三月。後に『中世庶民文学—物語草子のゆくへ』(平成元年、汲古書院)に所収)、『鉢かづき草子』の古版本について『ピアリア』七十五、昭和五十五年十月。後に『中世庶民文学—物語草子のゆくへ』に所収)。

(2) 拙稿「鉢かづき」の諸本(『寝屋川市史』第九巻「鉢かづき編」寝屋川市史編纂委員会、平成十九年三月)、および「御伽草子「鉢かづき」諸本の形成と展開」(基盤研究(C)研究成果報告書「汎諸本論構築のための基礎的研究—時代・ジャンル・享受を交差して—」平成十九年三月)。

【翻刻の凡例】

- 一 原則として現在通行の字体に拠り、常用漢字表にある字体はそれを用いた。
 - 一 通読の便を考慮して句読点を加えた。
 - 一 濁点は原文にあるとおりに付した。
 - 一 反復記号「ヽ」は原則そのままとしたが、漢字の反復で「く」が使われているところは「々」に変換した。
- (例) 「人く」↓「人々」
- 一 ミセケチは右傍らに()内以示した。
 - 一 明かな補筆は「」内に入れて本文中に示した。
 - 一 丁の移り目は(上1オ)……、(下1オ)……のように、上下巻でそれぞれ示した。
 - 一 挿絵は【絵1】……のように上下巻を通して示し、その描かれた内容を簡単に《》内に記した。

【翻刻】

はちかつき上

なかむかしの事にやありけん。かはちのくにかたの、へんに、いゑたかの中將と申人おはしける。此人は、かすのたからをもち給ひ、なに、つけても、とほしき事なく、しいかくわけんに心をよせ、あかしくらし給ひしか、あるときふうふ、ひかしおもてのはなそのにたちいて給ひ、木々のこすゑをなかめ給ふに、一ゑさくらに八ゑさくら、いまをさかりと(上1オ)みえわたる。のきはのむめはちりしきて、木すゑはかりのこりつ、物あはれなる折ふ

しに、いつくともなく、ことりあまたとひつれて、木々のこえたにとひちかひ、おとりは糸をふくみかよへは、めとりはあたゝめはこくむを、ふうふつくく御らんし、あのてうるいちくるいたにも、子はおもふならひかや。さてもわれらは、いかなるくわこのるん(上1ウ)くわにて、子といふもの、なかるらん。かすのたからをもちても、こせのたよりにあいならむか、一人なりともよつきをもちてこそ、ふうふのなからん、こせほたいをもとふらはれ、ごくらくふたいのうてなにも生れんすらめ。おもへは心ほそきなり。いまや此たからを神仏にまいらせ、一人なりとも子をいのらん。尤とて、ふうふうちつれ、(上2オ)氏仏とたのみ給ひたる、はせのくわんをんへまいりたまひ、三十三とのらいはいをたてまつり、ねかはくは御ほとけ、一人の子をさつたまへといのられたる。(上2ウ)

【絵1】(上3オ)《いゑたかの中将亭の一室。いゑたかと北の方が向かつて座す。庭に面した部屋で、庭には紅梅が花を咲かせ、枝に一羽の小鳥がとまっている》

いたはしやふうふ、一七日こもり給へとも、さらに御むさうのしるしもなし。つけなきことをかなしみ、かさねていのり給へは、二七日のあかつき、としのよはひ十六七の女らう、この世の人ともみえぬか、こうはいのこそてに、くれなるのはかまふみく、み、まことになんぢこのあいた、一人の子をさつけよと、かんだむくたきいのれとも、なんちか(上3ウ)子になるへきもの、あめか下にはなし、おもひきれやとのたまひて、かきけすやうにうせたまふ。(上4オ)

【絵2】(上4ウ)《長谷寺にいえたか夫婦が参籠し、籠堂で寝入っている。その二人の枕元に、朱色の小袖で紅のふうふゆみのうちにてのたまふやう、もとよりもかなはぬねかひにあればこそ、ふかく仏をたのむなれ。かなはぬことのかなふこそ、神やほとけのちかひなれ。此御ほとけ御ほんちは、十一めんのけしんとして、しゅじやうのね

袴をはいた若い上臍が、両手に箱を捧げてやってきた様子》

かひをみてたはまはんと、ちかひたまふ事なれば、せひとも一人さつたまへと、なみたをなかしいのり給ふと覚えければ、ゆめ（上5オ）はそのまゝ、さめにけり。かくてふうふ、けにありかたき御じけんかなと、なをもらひはひたてまつり、三七日そこもらるゝ。二七日五日と申あかつきに、かたしけなくもくわんをんは、八十よのらうそつと御身をへんけ、まことになんぢふうふ、いのりける心さしせつなきによつて、一人の子たねとらするなり。さりながら、この子三さいといはんととき、（上5ウ）ちゝは、二人かあひたに、一人かならずすへきなり。よしうらみともおもふなよ。子ゆへにおはると思ふへし。さりながら、まもり仏となるへしと、ねんころにしめし給ひ、かきけすやうにうせ給ふ。（上6オ）

【絵3】（上6ウ）《長谷寺でいえたか夫婦が寝ている傍らに、薄茶色の衣を着た僧侶があらわれ、法具のようなものを左手に持って、二人に申し子を授ける》

ふうふゆめうちさめて、ありかたき御じけんかなと、よろこひのらひはひたてまつり、やかてけかう申されける。さるほどに、きたのかた、こゝの月のくるしみ、十月はんと申に、御さんのひぼを、たいらかにときたまふ。御子とり上みたまへは、たまのこどくなるひめきみなり。ふうふよろこひかきりなく、そてのうへのたまとかしつき給ふ。ほとなく（上7オ）月日くれ過て、三さい五さいもはやくくれ、七さいにぞ成たまふ。七さいと申秋のころ、おもはずに、はゝうへみかせのこゝちとのたまひ、一日二日とすき給ふほどに、いよくおもり給へは、いゑたか大におとろき給ひ、さまゝあつかひたまへとも、さらにしるしもまします。すてにかきりとみえければ、いたはしやは、うへ、ひめきみをちかつけ、（上7ウ）みとりのかんざしかきなてて、あらむさんや、十七八にもなり、いかなる人にもみせをき、心やすくみをきなは、いかはかりうれしかるへきに、さはなくて、すてをきゆかんことかなしさよと、なみたをなかし給ひける。姫君ももろともに、かなしみ給ひけり。母上なかるゝなみたをと、め、

そばなる手箱をとりいたし、中にはなにをか入れけん、(上8オ) よにおもけなるを、ひめ君の御くしにいた、かせ、そのうへに、かたのかくる、ほとなる(はち)をうちさせまいらせて、は、うへかくそ、よみたまひける。

さしもくさふかくそたのむくはんせをんちかひのま、にいた、かせぬる

とうちえひしたまひ、つゐにはかなく成給ふ。(上8ウ)

【絵4】(上9オ)《いえたかの中将亭の一室。亡くなって床に伏した北の方を前に泣くいえたかと鉢をかついた姫

君。他に二人の女房の姿も描かれる》

ち、うへ大になけきたまひて、いとけなきひめをは、などやすてをき、いつくともしらすきえうせ給ふぞ、となけきたまへとかひそなき、かくてなこりはつきせねとも、あるへきことにあらされは、むなしき野へにおくり給ひ、たき、をつみあげ給へは、花のすかたはけふりとなり、月のかたちはかせとなり、ちりける事こそあはれなり。さてあるへきにあら(上9ウ)されは、御跡さまくとふらひ給ふ。かくてち、うへ、ひめ君をちかつけ、みなしことなりたることのおひんさよ、とのたまひ、いた、きたるはちを、とらんとしたまへと、すいつきて、さらにとられす。ち、は大になけき、は、こそうするとも、なんちまでかたは物にならんことのかなしさよと、なけき給へとかひそなき。かくて月日もたち行は、あとのけうようね(上10オ)むころにとりをこなひたまへとも、おもひはいよく、ひめ君にそと、まりける。はるはのきは梅かえの、さくらはさきて、木すゑまはらのあをばそと、名こりをしくは思へとも、またこん春をまちてさへ、月は山のはに入たまへは、こよひのやみとへたち、又こん夕部にいてたまふ。いつの日の、いつのくれにかわかれしを、いかなる人のふみそめて、う(上10ウ)つ、にもあふことたえてなかるらん。おもひまはせはをくるまの、やるかたなきふせひかなと、よそのみるめあわれなり。さるほとに、ち、御せんの一そく、したしき人、よりあひ、いつまでおのこのひとりはずみかたし。とこのつゆ袖をひた

しても、かひなき事にありければ、いかなる人をもかたらひて、あかてわかれしなごりをも、なくさみ給へとす、(上11オ)められ、さきたつ人はとにかくに、残るうき身のかなしさよ、おもひしこともよしなくて、ともかくも、御はからひもす、められける。其うへはちからをよはずとありければ、一もんの人々よろこひ、さりぬへき人をもとめつ、もとのごとくにむかへをく。うつれはかわるよの中の、人の心ははな、れや、秋のもみちのちりすきし、其おもかけは、ひめきみば(上11ウ)かりそなける、かくてかのま、は、御せん、此ひめきみみたまひて、かゝるふしきのかたはもの、世にもある事よとて、にくみ給ふ事かきりなし。さて、ま、は、の御はらに、ひめきみ一人いてき給へは、いよく此はちかつきを、みしきかしと、なみのたちゐのことはまで、空ことをのみ給ひて、つねにはち、にざんそうす。はち(上12オ)かつき、あまりやるかたなきま、に、は、うへの御はかへゆき、なくなく申させ給ふやう、さらぬたにうきにかすそふよの中の、わかれをしたふなみた川、しつみもはてすなからへて、あるにかひなきわか身そと、おもふにいと、ふしきなる、かたはさへつきぬることのうらめしや。かゝる浮身を、うき世に残したまはんより、はやくむかへ(上12ウ)とり給ひ、一つはちすのえんとなしたまへと、なけき給ひてかくなん、

の、すゑのみちふみわけていつくともさして行なんみとも思はず

となくなくなめたまひて、かへらせ給ふを、は、上み給ひて、ち、うへにちかつき、はちかつきか、つねに仏神にまいり、みつからをふかくのろひさふらふ。これいつわりとおほしめさは、(上13オ)た、いま、はちかつきをよひよせ、せう人には女房たちをあつめ、まのまへにてとはせ給へ、とくちをゆかめ、いかりければ、いゑたか、はちかつきをめされける。(上13ウ)

【絵5】(上14オ)へいゑたかの中将亭の一室。菱繋ぎ模様の几帳と立湧模様の屏風に囲まれた継母が、鉢をかづい

た姫をせめる様子。いゑたかと女房のしきしまの姿も見える》

はちかつき、なにこゝろもなくまいり給へは、母うへ、かほにもみちをちらし、何とて御身は此ほど、われくかめを忍び、仏神にいのりをかけ、われをはのろひたまふぞ。けいぼとはいひながら、御身をけふにいたるまで、われはにくむこともなきに、なにのうらみにかくまで、ねたみふかく思ひける事こそふしきなれと、いひければ、しきしまといふ（上14ウ）女房、さしいて、申けるは、まことに此ほどひめきみは、日々にいつくともなくいてさせ給ひ、は、うへにきつかひをかけたまふこと、おさな心にもおほしめしとまり給へと、一つくちそろへて申ければ、ち、もいはんかたなく、なみたくみておほしければ、はちかつきは、まことの、ならぬ身のかなしさは、あらぬ事をゆいつけるよ、と思召けれども、とかくの事（上15オ）をものたまはず、とにかくに、かたはなる身こそつらけれど、なくよりほかの事はなし。かくてもせんかたなき身なれば、あけぬくれぬとすくし給ふほどに、いよくま、は、にくみねたまひて、いまのひめきみをちやうあひしたまへは、けにんけらいの下女はしたにいたるまで、たうだいのぎよいにそむかして、ひめきみのみうやまひ、（上15ウ）はちかつきをしためにつけ、あなつるほどにくちをしく、あわれこひしきむかし哉、は、上世にもましまさは、いかばかりいとをしく、あはれみたまはんものをと、おもひまわせはをくるまの、やるかたもなきわか身やと、なくよりほかの事はなし。しかれどもは、うへ、にくみはいと、まされとも、あはれむ事はなかりけり。あるとき、いゑたかとのうちむかひ、しほく（上16オ）としたるふせひして、うちなみたくみ、えければ、いゑたか、つくくみたまひ、御せんいつものけしきにかはり、物おもひなるありさま、いかなる事をおほしめしけるぞと、いゑたかももろ共に、うちなみたくみたまふぞ、はかなき。（上16ウ）

【絵6】（上17オ）《いゑたかの中将亭の一室。継母といゑたかが、お互いに涙を抑えながら語り合っている様子》

ま、は、たばかりすましけるよとうれしくおもひ、そのきにてさふらふ。このほど、みつかられいならず、なやみさふらふほとに、こゝろもとなく候て、はかせをちかつけうらなわせ候へは、はちかつき、われをのろひたまふ事、た、事ならぬよしを申。いつそやも申ことく、神仏にたからをまいらせ、みつからをいのりたまふこと、そのかくれ更にな（上17ウ）し。なにのうらみにかやうに、われをのろひけるそとおもへは、身のけよたちて、そ、ろおそろしく、心なからわつらひさふらふ。とにかくに、わか子ならぬものを、せつかんし候へは、せけんのおもわくもはちかはしく候へは、た、みつからはいとまたまはり、ふるさとへまかりかへらんと、まことしやかにいつわりければ、いゑ（たか）大におとろき（上18オ）たまひ、われはおとこの身にて候へは、さやうにくわしき事をもしらす候。そのきならはうちをきてもなにかすへき、とう／＼いつちへも、をいうしなひ候はん、とのたまふ事こそ、あわれなり。（上18ウ）

【絵7】（上19オ）《いまたかの中将亭の一室。継母といゑたかが対座するが、継母は泣きながら鉢かづきの非道を訴えている様子》

やかてはちかつきをちかつけ、いかになんぢ、ようしやうより、は、にをくれければ、一しほ御身をいとをしく、なき人のかたみそと思ひ、せいじんするをまちつるに、おもひのほかに引かへ、けいほをにくみのろふ事、をさな心にも、ちかころおそろしきしよそんなり。けふよりしては、おやともわれをおもふなよ、我もわか子と思ふまし、いつちへもゆくへしと、さもあらけな（上19ウ）くの給へは、いたはしやはちかつき、けんざいのち、うへたにたはかられ、かやうにの給ふうへは、とかくのへんしにをよはすし、なみたなからに、やかたをいつくともなく、いてたまふ事そあはれ也。（上20オ）

はちかつき下

さるほとに、はちかつき、なく／＼まよひ給ふほとに、四てうのつじにいて給ふ。きやうわらんへこれを見て、さてもふしきなる者哉と、われも／＼とたちより、はちをとらんとしければ、あないたやとておめき給ふほとに、こはいかなるものそや、た、にんけんにてはよもあらし、いかなる山のをくよりか、ひさしき(下1才)はちかへんけして、かやうに人をたはかるにそ有らん。いかさまにんけんにてはなしと、ゆひをさしておそれける。又、あるもの申けるやうは、たとひはけものにてもあれ。てあしのはつれのうつくしさよと、とり／＼にこそ申ける。さるほとに、其頃、四條の三ゐの中將とのと申人おはしける。折ふし、えん(下1ウ)ぎやうだうして、かへりたまふか、はちかつきを御らんして、あれよひよせよ、との給へは、わかきさふらひとも、二三人はしりいて、かのはちかつきをつれてまいる。いつくのくに、いかなるものそとおほせければ、はちかつき申やう、われはつのに、かたの、迎の者にて候か、は、に程なくおくれ、おもひのあま(下2才)りに、かゝるかたはさへつきて候へは、あわれむもの、なきまゝに、なにはのうらのよしあしと、あしにまかせまよひありき候、と申ければ、(下2ウ)

【絵8】(下3才)《四條の三位中将亭の一室。鉢かづきと三位中将が対面している場面と思われる。ただし、中将はいゑたかと同じ侍烏帽子に狩衣の姿である》

さくほとの人々、あなあわれにふしきなるかたはかなとて、きもをつふしおとろき、(下3ウ)ちうしやうとの御らんして、さてもふひんなる事哉、そのはちをとりてみぬかとおほせければ、すいつきてさらにとられす候と申ければ、さてはふしきなるしたひ哉。人のもとにはかたはなるもの、あるもよきものそかし。ふちしておくへし。さりながら、身のなふはなにかあるそ、との給へは、(下4才)なにと申へきやうもなし。は、にかしつかれしとき

は、しいかくわんけんのみちに、ちやうしたるよりほかは、へちになふはなし。それもいまこのありさまにて、かくといわんもことはつかしかるへし、とおもひければ、なに、てもさしたるけいは候はず、と申ければ、さてはなふなくはゆとののを（下4ウ）けとありければ、いまたならばぬ事なれと、ときよにしたかふならひなれば、ゆとの、ひをこそたかかせる。あけぬれば、みる人わらひなふり、にくかる人はおほけれど、なさけをかくる人はなし。あけくれ御ぎやうずいよ、はちかつきとて、三かう四かうも過ぎるに、せめおこされていたはしや。またふし（下5オ）なれぬしの竹の、をのれと雪にうつもれて、ふしたをれたるふせひして、ものはかなけにをきなをり、おもひをしはの夕けふり、たつなもくるしとうちなかめ、御きやうはわきさふらふかやと、さいそくするてなれば、御あしのゆわかせや、はちかつき、とけちをする。うき身ながらもきあかり、みたれしばをひき（下5ウ）よせながら、かくこそつらねたまひける。

くるしきはをりたくしばの夕けふりうき身と共にたちやきえまし

かやうにうちなかめ、いかなるあんくわのむくひにや、かゝるうきよにすみそめて、いつまていのちなからへ、かほとにものおもふらんと、かさねてつらねたまひける。

まつかせの空吹はらふ（下6オ）よにいて、さやけき月をいつかなかめん

かやうにえひして、あしのゆをそわかしける。さるほとに、此さいしやうとののは、御子四人もち給ふ。三人はみなくありつきたまふ。（下6ウ）

【絵9】（下7オ）《四條の三位中将亭の一室。亡くなつたいたゑたかの北の方や継母と同じ装束で、几帳と屏風に閉

まれた上臈を中心にして、右に冠と黒の直衣姿の男子、左に三人の女房の姿が描かれる》

四はんめにあたり給ふ、さいしやうの御さうしと申は、みめかたちよにすくれ、なさけふかき人なるか、いろこの

みの人にて、いかなる山かつ、しつのめなりとも、みめかたち心さまよからん人を、と心かけ、いまたきはまるつまもなく、あかしくらし給ふか、とのうへも御あにたちも、御ゆとのへいらせ給へ共、御さうしはかりのこ（下7ウ）らせ給ひ、さよふけて、ひとりゆとのへいらせ給ひけるか、かのはちかつき、御ゆうつしさふらふと申こゑ、ゆふにやさしきこはいろなり。御きやうすいとて、さしいたす手あしのうつくしき、ごんじやうげにみえければ、ふしきにおほしめし、やあはちかつき、人もなきに、なにかはくるしかるへき、（下8オ）御ゆとのしてまいらせよ、とのたまへは、いま更むかしをおもひいたして、人にこそゆとのはさせつれ、人のゆとのは何とてするやらん、とはおもへとも、しうめいなれはちからなく、御ゆとのへこそまいりける。御さうしは御らんして、かゝるやさしきかたち哉、なにとやらんものよはく、あひきやうすくれうつく（下8ウ）しく、かゝる女はういまたみずと、やかて御こゝろうつしたまひ、みすてかたくそおほしける。そのよはあさましき、しはのいほりにと、まり、いかにやくはちかつき、おもひそめにしくれなるの、いろはうつるふ事なりと、君とわか中かはらしと、千秋のまつにちきりをはるかにかけ、てんにあ（下9オ）らはひよくの鳥、ちにあらはれんりのえた、とそちきり給ふ。かくてそれよりは、日のくるゝをまちわひ、よなくかよはせたまひて、あさからぬ御ちきり、中（々々）いわんかたなし。つゝ、むとすれともれきこえ、ち、うへふうふの人々、いか、はせん、あさましや、あのやうなる、いやしきゆとのゝ、ゆがしにちかつき事、（下9ウ）一もんのはぢといひ、わか身のちじよくといひ、いか、せむとせんきし給ふ。めのと申けるは、いかなる事にや、この君はつねにものはぢし給ひて、かゝるわさなどはおもひもよらぬ君にてましますか、このはちかつきみそめたまひてのちは、人めもつゝます、うちこもりたまへは、なにとし給ふとも、お（下10オ）もひはなれたまはし、と申ければ、御あにたち申給ふやう、しよせんこのはちかつきをたはかりいたして、いつくへもおいうしなひ給へ、とのたまへは、このきしかるへしとて、やかて、こよひはうへに御くわいあ

り。いて給へと、御さうしへつかひをたて給へは、うけたまはるとその給ひける。やかてその日も（下10ウ）くれければ、御さうし、いかにはちかつき、こよひはうへに御くわいありていつるなり。そのあひた、さひしく侍るともまち給へ、やかてかへりこん、とのたまひて、しばのとほそをいて給ふ。その、ち、ち、うへの侍とも、かねてこしらへたることなれば、しばのとほそへしのひ入、はちかつきをたばかりいたして、（下11オ）よど川の、ふかきふちのすさまじきところへ、うちこみてかへりけるそあわれなる。をりふし、あきうとふねのとをりけるか、なにやらん、川なみにつれて、もの、うひつしみつなかけれるふしきさよとおもひ、ふねをちか付てみれば、はちなり。あなふしきやとて、はちをひきあげみれば、下は（下11ウ）人なり。きやうかるいきもの哉とて、きしのうへ、なげあけたり。（下12オ）

【絵10】（下12ウ）《商人船の船頭が淀川から鉢かづきを陸に投げ上げた場面。岸の上に鉢かづきが佇み、川の船上には船頭の他に男性二人と女性一人が乗っている》

はちかつきは、ひとへに夢のこゝちにて、かゝるつたなきうき身の、た、一すちにきえもせて、二たひものおもふ事のくちをしさよとて、かくえひし給ふ。

河なみのそこにこの身のとまれかしなと二たひはうきあかりけん

さるほとに、此ほど、なれまいらせし人も、おもへはこひしく、わかみはかすなら（下13オ）す、とにかくに、くわはうなき身のあさましきよと、なみたにくれてゐたまひける。さるほとに、さいしやうとの、うへよりかへらせたまひて、みたまへは、はちかつきはみえず。むねうちさはき、こはいかに、いつくへと人にたつね給へ共、しらするよしを申。あなふしきやとて、御めのとのさきやうのしんをめして、（下13ウ）たつねたまへは、ち、うへ、御あにたちのはからひにて、よと川へなかし給ふよし、けさうけたまはり候、と申ければ、あさましや、かくたは

かり給ふ事のはかなさよ、このはちかつきにはなれては、わかいのち一ときも有へからず、さてもうらめしき人々哉、とうちふしてなき給ふか、さりながら、われはよと川へゆきて（下14オ）たつねへし。もしむなしきしかひあるならば、とり上てけうやうすへし、御ともせよとおほせければ、うけたまはりて、二人いそきよどへおはして、かのかみ下をさかし給へ共、しかひは見えす、いか、せむとかなしみ給ふ所に、はるか川下のきしのほとりに、なにやらん、かすかにみゆる。いそきより（下14ウ）てみ給へは、はちかつきなり。こはいかにと、たかひにあきればて、ちきりはくちせぬものにこそとて、よろこひいそきかへり給ふ。さるほどに、ち、うへ、は、うへ、いか、せんとなけき給ふ。めのと申けるやうは、とかく此君は、はちかつきにおもひはなれたまはし。〔今は〕御心のま、にしたまへかし。又、おもひはなれたまはんじせつもある（下15オ）へし、と申ければ、ち、は、あにたち、大にいかりて、なにとてすちなき事をは申そ、けふより、われく、かまへ、はむやく、とのたまひける。その、ち、は、うへの給ふやう、しよせん、御さうしに、はちをあたへへし。よめくらへとなつけて、みなく、あつめなは、さためてはちておいるたすへし、とおほせければ、もつとも（下15ウ）このきしかるへし、とそさため給ふ。やかて、さきやうのしんまいりて、此よしをかたれば、むねふくれ、いか、せんとなけき給ふ。（下16オ）

【絵11】（下16ウ）《四條の三位中将亭の一室。冠に赤色の直衣姿の御曹司と、狩衣姿の男（乳母のさきやうのしん）であるう）が対面する様子。男の装束はいゑたかの中將と同じもの》

さるほどに、とのうへよりの御ふれには、みやうにちのそうく、に、よめくらへしたまふほどに、いつれもはなやかにいてたちたまひて、しかるへしとそふれ給ふ。いたはしや、わかきみはちかつきにむかひ、いか、せん、あさましや、われく、をおいうしなはんために、かゝるたくみをし給ふ事のかなしさよ、となき（下17オ）給ふ。はちかつき申されけるは、われゆへに、君をいたつらになし申へきか、われらいつくへもいてゆかん、と申されければ、

さいしやう仰けるは、御身にはなれては、かたときもいられ候まし。いつかたへなりとも、ともにいてん、との給へは、はちかつき、おもひわたるかたもなく、あんしわつらひゐたりける。かゝる所に、(下17ウ)とのうへの女はうたち、いかさま、たゝならぬかたはものにてこそあるらん。いさや行てみんとて、おのゝはちかつきかもとへきたりて、みやうにちは御よめくらへの侍るか、さためて、いてたまはてはかなふましきか、いたはしくおもひまいらせ候。その有さまにては、御さしきへは、中くはれかま(下18オ)しく、なましるに、わか君の御ちしよくとなり侍るへし。いつかたへもいてたまはて、とぞ申ける。(下18ウ)

【絵12】(下19オ)《四條の三位中将亭の一室。几帳と屏風に囲まれた上臈と、二人の女房が縁側に座る鉢かづきに

さるほとに、わか君いてなんこともさすかなり。いでくといふもいかなり。しよせむ、いつかたへもいつへきと、なみたにくれてうちふし給ふ所に、はちかつき、しんくをいたし、なむしよ天、三ばう、ねかわくは、このいた、きたるはちおとしてたひ給へ。ことに「は」うちはせてらのくわんせをん、ふかくたのみ奉る。それにかな(下19ウ)はぬうき身ならば、たちまちいのちめしたまへと、かんたんくたきいのりたまへは、けに三はうもあわれみ給ふにや、いた、きたるはち「に」、はこともに、たちまちまへにぞ、おちにける。(下20オ)

【絵13】(下20ウ)《四條の三位中将亭の一室。鉢かづきの鉢がとれて落ちた場面。冠に黒の直衣姿の宰相と、小袖

さいしやうとの、おとろき給ひ、ひめ君の御かほよくみ給へは、十五夜のつきのくもまをいつるに事ならず。かみのかゝり、すかたかたち、なに、たとへんかたもなし。わか君うれしさかきりなし。さて、おちたるはこをみたまへは、ふたつかけごの其下に、こかねのまるかせ、こかねのさかつき、しろ(下21オ)かねのこひさけ、しや

きんにてつくりたる、みつなりのたちはな、しろかねにてつくりたる、けんほのなし、十二ひとへの御こそて、くれなゐのちしほのはかま、かすのたからいれられたり。ひめ君これをみたまひて、わかほは、はせのくわんをんを、しんし給ひし御りしやう、とおほしめして、うれしきにも、かなし(下21ウ)きにも、さきたつものはなみたなり。かほとめてたき人なるを、なにとて三ばうも、いま、てかくておき給ふぞ、とよろこひ給ふ事、た、てんへもあかる心ちし給へり。さらは、よめあわせにいつへきと、したくし給へり。すてによもあけければ、やかたのうち、さ、めきあへり。人々いひけるは、かほと御さしきへ、(下22オ)あのはちかつきかいてんと、いまいつくへもゆかぬことのふとくしんさよ。いかさま、おもしろきわらひ(もの)かな、とおめきける。とのより御ふれには、はちかつきかさしきをは、一たんひきく、しきものには、ふるしきにはむしろしかせ、いかにもはけたるこきにてすへへきなり。そのほかのものとも、いかにもく、げひてこしらへをく(へき)也、(下22ウ)と仰つけられける。さる程に、ちやくしのよめ子は、じんじやうなる御しやうぞく也、御年のほど、廿二三計と打みえて、しるき御こそてのうへに、いろくの御こそてめし、くれなるのはかまふみく、み、御くしはたけにあまり、あたりもか、やく計なり。御ひきで物には、からあや十疋、こそて十かさね、ひろふたにいれ(下23オ)まいらせ給ふ。二らよめこは、御年廿はかりにて、しんしやうにけたかく、はへにすくれてみえ給ふ。御しやうそくは、はたにはす、しのあわせ、うへにはすりはくの御こそて、かうはいのぬいもの、御はかまふみく、み、さて引出ものには、こそて三十重まいらせ給ふ。三なんよめこも、かたち、いしやう、引出物にいたるまで、おとりたま(下23ウ)はす。三人の御せんたち、よしのはつせのはなもみちに、うたかひける。人々申けるは、いそきはちかつきかよかし。いてんをみてはらわんと、ひやうしをとりにて、た、みをた、き、のきばのとりにはあらねとも、はねつくるひしてまちかけたり。さて三人の御せんたちも、いまやくとまち給ふ。又、しうと御前(下24オ)仰けるは、いつ

くへもゆかすして、た、いまはちをみん事のかなしきよ。なましるに、よめあはわせなど、いはすとも、よきもあしきもしらぬていにて、おくへきものを、とおほせける。さるほどに、はちかつきおそしと、たひくつかひたちければ、さいしやうとのきこしめし、た、いまそれへまいると仰ければ、人々わらはん(下24ウ)とそ、じゞめきける。さるほどに、はちかつき、いてたち給ふ。御年は十六、御しやうそくは、はたにはしろきねりきぬ、うへにはからあや、かうはいむらさき、いろくの御こそて、くれなるのちしほの御はかまふみく、み、ひすいのかんさしゆりかけて、あゆませ給ふ御すかた、山のはいつる十五やの、月のよそほひほどこ(下25オ)せり。春のはしめのいとさくら、つゆをふくめるはちすはの、花にかすみのうちかり、うらみかほなるふせひなり。まちまうけたる人々、めをおとろかし、きもをけし、あきれてこそはいたりける。これははちかつきにてはあるましき。た、てんにんのけ、んかとそおとろきける。さるほどに、一たんさかりたるさしきになをらん(下25ウ)とし給へは、しうと三位の中しやうとの、いかて天人のようがふを、下座におくへきとて、しやうしさせ給ふ。あまりのいとをしきにとて、は、御せんひたりのひさへ、よひまいらせ給ふ。さて、しうと殿への御ひきてものには、しろかねのだいに、こかねのさかつきすへ、三つなりのたち花、からにしき十たんまいらせ(下26オ)給ふ。しうと御せんへは、そめもの三たん、こかねのまるかせ、ひやうとらのかは、こかねのたいにすへて、まいらせたまふ。人々これをみて、かたちいしやうにそうおふし、せかひにまれなる引出ものふしきさよ、とそきもをけす。三人のよめたちをも、はしめはうつくしくおほしめしけれとも、此君にくらふれば、(下26ウ)ぢぎうばぎつのそのまへに、かきやげたうかならひゐたるかことくなり。かくて、御さかつきはしまり、しうとめ御せんきこしめし、やかてひめ君にさし給ふ。(下27オ)

【絵14】(下27ウ)《四條の三位中将亭の一室。嫁比べの場面。三人の上臈と四人の貴公子が描かれる。人々が囲む

台の上には、赤い巾着や青の壺などの引き出物が描かれている》

三位の中將仰けるは、此たひのひきても〔の〕、ひめ君にまいらせんとて、七百ちやうの所をは、えいたいとてひき給ふ。さて又、さいしやうとのには、一千ちやうをそまいらせらるゝ。くわはうとも、いわんかたなし。三人のよめ御せん、おもしろからすのけふのさしきやとて、みなめんくゝにたち給ふ。めんほくなうそ、き〔下28オ〕こえける。三人のきんたちも、よからぬことにおほしめせとも、ちゝのはからひなれば、ちからなく、さるほとに、くらゐをもさいしやう殿にゆつり給ふ。やかて三ゐの左中將とそ成給ふ。いよくふうふのかたらひあさからす。御子五人までいてきたまひ、すゑはんじやうし給ひけるとかや。これひとへに、はせのくわん〔下28ウ〕をんの御りしやうときこえける。かのたからものともは、うちのほうさうにこもりけるとかや。八ちくのみやうてんのはこと申は、此はちはこの御事也。ありがたき、ためしとかや。〔下29オ〕